

4 時30分までの長時間に及んだ。内部試験官 (Internal examiner) は Dr Simon Gieve (University of Leicester), 外部試験官 (External examiner) は Dr Irena Kuzborska (University of York) であった。Dr Irena Kuzborska が外部試験官を引き受けてくれたおかげで、私の試験が設定された。両試験官とも私の博士論文を詳細に読み込んでいた。非常に厳しい質問の連続であり、生涯忘れえぬ 2 時間30分であった。これ程までに学生を追ひこむ英国の学究の道に対する厳しさの体験は、私にとって宝となった。また、事務職の Ms Leigh Blair (Executive Clerk) と Ms Sharon Simpson (Programme Administrator) には、しばしば連絡をいただき世話になった。

第69回 (通算第152回) : 2014年6月26日 (木)

(座長: 大沼誉英)

## 摂食嚥下リハビリテーション 外来の設置に向けて 一心とからだの健康リハビリテーションー

江川広子 (歯科衛生士学科)

野村章子 (歯科技工士学科)

河野雅之 (附属歯科診療所 Dr)

小林智美 (附属歯科診療所 Dh)

平成25年12月より本学附属歯科診療所では“摂食嚥下リハビリテーション外来”設置の準備をすすめ、平成26年4月の「摂食嚥下リハビリテーション診療報酬」改定に伴い、リハビリテーションを開始する運びとなった。

そこで、歯科診療所を定期的に受診している96歳の女性、“流涎とむせ”を訴えた患者に対して口腔・摂食嚥下機能低下の有無をスクリーニングテストならびにアセスメントを実施し、そこで得た情報から加齢による機能低下や心不全が関連しているのではないかと考えた。リハビリテーションを始めるにあたり、患者の症状に対応して歯科衛生ケアプロセスの一連の流れに沿って実施した。その内容は、患者の問題を解決するために歯科衛生士が介入する歯科衛生計画を立て、その後、計画に従って順次、実施する。歯科衛生介入後、患者の状態はどのように変化したのか、効果が上がったか、目標の達成はどうであったのかを判断した。

対象患者は、月2回の歯科受診で義歯調整と歯周

メンテナンスのリコール時に、リハビリテーションを繰り返した。対応して感じたことは、独居生活が長く高齢と聴覚障害をもっていることから、対人関係を築くことができなかったことが伺えた。このことから、患者対応に十分配慮しながら、受容の精神で暖かく接することを心がけた。患者にとってのリハビリテーション効果は、口腔機能等が向上していくことの喜びと、受診のために外出する機会が増えて、高齢者の閉じこもり予防とQOLの向上へとつながったのではないかと考える。

また、リハビリテーション中の患者との信頼関係を築くことができ、心とからだの健康リハビリテーションにつながった経緯を報告した。

第70回 (通算第153回) : 2014年7月24日 (木)

(座長: 内田杉彦)

## CAD/CAMの最前線と教育への応用

植木一範 (歯科技工士学科)

平成26年4月よりCAD/CAM冠の一部が保険適用となり、今後の日本の歯科医療における当技術は、治療方法として不可欠なものになったといえる。一方、3Dプリンターや口腔内スキャン等の技術革新は途上にあるとされ、さらなるCAD/CAM治療の発展の可能性が示唆されている。本発表では、現状のCAD/CAM新技術について紹介し、教育への応用を考察した。世界に通用する一流の歯科技工士を養成している明倫短期大学としては、新技術が従来の歯科技工技術に置き換わるのではなく、CAD/CAM等の新技術を歯科技工のツールとして応用し、世界に負けない手技と機械の融合技術で高品質かつ高速に歯科技工装置を製作できるように研究と教育を進めていきたいと考えている。教育の中でも、知識やオペレーションだけでなく、運用や応用の可能性、品質に関する知識なども含めて、グローバルかつ将来を見据えた考え方ができる歯科技工士を養成していきたいと思う。今後は、カリキュラムの改変を含め、新技術に対応していく予定である。